

COPMニュース 第25号

(過去のニュースは<http://www.npota.com/>精神科作業療法の中にあります)

発行日：2012.11.7 発行者：吉川ひろみ

県立広島大学保健福祉学部 〒723-0053 三原市学園町1-1

TEL 0848-60-1236 FAX 0848-60-1134 E-mail yosikawa@pu-hiroshima.ac.jp

そろそろ COPM ニュース書こうかと思っ
たら、前号が去年だったことがわかり、びっ
くりしました。24号を書いてからいろいろな
ことがありました。

4月末から5月上旬にかけて、Anne Fisher
さんが三原に来て、スクール AMPS と社会交
流 評価 (ESI ; Evaluation of Social
Interaction) の講習会をしました。学生向け
にも講義をしてもらい、作業に焦点を当てた
実践 (occupation focused practice, OFP) と
作業を基盤とした実践 (occupation based
practice, OBP) という興味深い話を聞くこと
ができました。作業療法士がクライアントの
作業について聞く、情報を集める、といった
ことが OFP で、クライアントが実際に作業
を遂行するのが OBP だと、Fisher さんは定
義しています。

Fisher さんの定義によれば、COPM をす
るのは OFP ということになります。COPM
をした後で、クライアントと作業療法士が話
をしているだけとか、心身機能の評価や訓練
をしているだけなら OBP にはなりません。
心身機能には、クライアントの興味や価値観
も含まれます。AMPS は、クライアントに馴
染みのある作業を実際にやってもらうので
OBP ですが、作業遂行を観察する作業療法士
が、クライアントの心身機能や環境に焦点を
当てているなら OFP ではありません。クラ
イアントの作業に焦点を当て、必要な情報を
収集し、クライアントに実際にその作業をや
ってもらうことが、OFP でもあり、OBP で
もあります。

Fisher さんの講義の通訳をしながら、私自
身が通訳という作業に慣れていくのを感じま
した。できるようになってからではなく、や
っているうちに上手になる(習うより慣れろ)
を実感する経験でした。

今年担当した学生の卒業論文は、病院にお

ける作業遂行評価の有用性がテーマでした。
久しぶりに白衣を着て病院で過ごしました。
病院の作業療法士たちは、私が COPM と
AMPS を行う所を見ました。そして、以前よ
り COPM が使いやすくなったり、クライエ
ントの視点を重視するようになったそうです。
その一方で、クライアントの作業を重視した
実践を阻む壁を認識することにもなりました。

10月27日に、岩手県作業療法学会で講演
しました。宮沢賢治さんの「雨ニモマケズ」
を作業療法士流に考えてみました。賢治さん
がなりたいのは、病気の子どもを看病し、疲
れた母親を手伝い、死にそんな人や喧嘩して
いる人に言葉をかける人です。作業療法士な
ら、子どもが病気でも好きなことをして遊ぼ
うとしたり、疲れた人には、心休まる作業を
探したり、死にそんな人には、やり残した作
業をできるようにしたり、喧嘩してる人たち
には、共通の目標はないか、そのために一緒
にできる作業はないかを探すと思いました。

その後、「雨ニモマケズ」には、もっと重要
な示唆があることに気づかされました。それ
は、「自分を勘定に入れず」ということです。
OT をわかりやすく説明したい、OT を理解し
てほしい、OT ができる支援は何か、という
問いは、自分 (OT) を勘定の中心に入れてい
るのです。賢治さんは農学校で学び、土壌改
良の知識があったので、農民のために力を尽
くしたそうですが、気候が悪く作物が育たな
かった時には、農民から悪く言われ(苦にさ
れ)たそうです。「褒められもせず、苦にもさ
れず」というのは、「自分を勘定に入れず」と
いうことだったのです。私たちもクライエ
ントに対して「よかれと思って」作業療法を行
い、褒められれば嬉しく、苦にされたら悲し
いです。でも、大事なのはクライアントなの
で、自分が褒められるか、苦にされるかを勘
定に入れなくてもいいのです。

COPM をする時には、クライアントの作業のことを一番に考えればいいのです。OT が何をするかではなく、クライアントが何をするか、クライアントがどう思うかに焦点を当てれば、COPM はきっともっと上手にできると思います。

9月8日には、山梨で COPM の研修会をしました。トイレに行きたいと言うクライアントに対して、動作練習をしている人がいました。作業的存在という視点をもった時に、トイレに行くという作業は、その人の存在を表すと考えるでしょうか。世界作業療法士連盟の人権の声明書では、作業療法士が尊重するのは、意味のある作業をする権利だと記されています。意味のある作業とは、簡単に言えば、「したい、する必要のある、することを期待されている」作業です。これは、1990年から COPM の評価表に書かれていることです。

一人でトイレに行けるようになることが重要な作業だという人がいるとは思いますが、それは、病気が治りたい、もっとやせたい、もっと頭がよくなりたいなどという、人の欲求の一つです。作業療法が焦点を当てるのは、作業についての欲求（作業ニーズ）です。この作業をすることが私らしい、この作業ができて幸せだ、というように、自分が行う作業によって自分が定義されるような作業です。何をするか、何をしないか、すべての人は、自分が行う作業によって、唯一無二の存在となっていくのです。

山梨では、2人ひと組で COPM の演習をしました。これができたらもっと充実した生活になるだろうと思う作業、新たに挑戦してみたい作業、これをすれば家族に喜ばれるだろうと思う作業、今の社会にとって必要だと思う作業・・・私たちは、自分がすることで、私たちが暮らす世界を、よりよく変えることができます。自由で民主的な社会をよくと考える人が少なくない現代の日本では、一人の人が取り組む作業から、さまざまな可能性が広がるはずです。

湯浅誠さんの「活動家一丁あがり！」(NHK出版新書)を読みました。社会が抱える問題

に対して、活動を続けている人たちのことが書かれています。集団や地域を対象とした作業療法と深く通じるものがあります。人は自分のための作業だけをするわけではなく、他人や社会のための作業に取り組むことができます。自分が暮らす理想社会のためにできる作業を多くの人が行えば、排除される人のいない、みんながより暮らしやすい社会を創り出せるはずです。

5月26日に、浜松で開催された作業療法臨床実践研究会の研修会で、クライアントに COPM を行いました。作業所に通所している男性のクライアントには、失語症がありました。いくつかの作業があがった後で、私が「他にありますか」と聞くと、「うーん」と考えているようでした。そこで、「もっと趣味のようなことをしたいですか」と私が聞くと、即座に「違う」とおっしゃったので、「仕事みたいなこと？」と聞くと「そう」と言い、私が「何か打ち込めること？」と聞くと、「そう、打ち込めること」とおっしゃいました。というわけで、作業の問題の一つに「打ち込めることをする」と記載しました。この方は、就職を希望していますが、実現は困難な状況のようです。「打ち込めること」というのは、充実感をもたらす生産的作業をしたいということだろうと、私は推測しました。遂行度について聞く時に、「今は打ち込めることはありますか」と聞いたら、「パズル」と答えたので、「思ったようにすごく打ち込めてるを10点とすると、何点くらい打ち込めてますか」と聞きました。

この経験から、COPM では、具体的な動作を想定できないものにも、着目できるとわかりました。この方の場合、打ち込めそうな作業を、作業療法士や周囲の人たちと一緒に、いろいろやってみることになるでしょう。

魂が揺さぶられる作業、ほんわかした気持ちになる作業、さっぱりした気分になる作業、周りに認められる作業、世のため人のためになる作業・・・といった作業の意味から、具体的に遂行できる作業にたどり着く道もありそうです。